

# 学校連携モデル研究事業2017

大川 剛

School collaboration model research project 2017

Tsuyoshi Okawa

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第11号別刷

2018年3月30日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.11

March, 2018





図1-②裏面

- 各分野学芸員による出前授業の紹介
- 館内プログラム内容の紹介
- 貸し出し学習体験キット（ハンズオンキット）の紹介等の内容を掲載し、博物館教育普及事業の概要が学校教職員に理解しやすいよう工夫を行い作成した。

また、可能な限り県内各種学校を訪問し、学校へ本事業の周知に努めた。

表1：県内各種学校訪問先

学校名
竹富町立大原小学校
〃 古見小学校
〃 上原小学校
〃 西表小中学校
〃 白浜小学校
〃 大原中学校
〃 船浦中学校
石垣市立石垣第二中学校
〃 富野小中学校
国頭村立北国小学校
北大東村立北大東小中学校
伊平屋村立伊平屋小学校
〃 伊平屋中学校
〃 野補小中学校
那覇市立城南小学校
沖縄県立球陽高等学校

※訪問校は、2018年1月現在  
※リーフレット配布は全県各種学校

また、学校訪問の他にも各校種の教職員の直接来館においても、受入についての周知も行った。

結果、学校連携モデル校の協力校としては、2018年1月現在調整中の学校も含め、以下の4校、取り組み事業1つである。

(1) 沖縄県立球陽高等学校

※平成29年度より実施開始

- ①学習内容：学芸員による出前授業「故宫博物院資料と当館資料について」
- ②当該校の修学旅行（台湾）の、事前学習として
- ③実施年1回（学校にて）



図2  
沖縄の美術工芸と、台湾の故宫博物院収蔵資料について、高校生に講義する。

- ④出前授業後は当館へ来館し、美術工芸部門展時の鑑賞学習を行う。

(2) 国頭村立北国小学校【調整中】

- ①学習内容：学芸員による出前授業・調査「琉球使節の江戸上がりについて」「『遺老説伝』辺土の「星窪（7シグ）」調査」
- ②当該校における、地域学習のため
- ③実施：年1回～複数回（学校にて）



図3  
星窪調査で相互に協力写真は左から、地域ガイド、教育委員会、学校長

(3) 伊平屋村立伊平屋小学校【調整中】

- ①学習内容：学芸員による出前授業
- ※分野・内容については調整中
- ②実施：年1回（学校にて）



図4  
平成30年度移動展を皮切りに出前授業を中心に調整中。

(4) 県内私立中学校【調整中】

- ①学習内容：本館においてのボランティア体験
- ②実施：夏休み期間中（本館にて）



図5  
中学生による当館でのボランティア活動を通して、キャリア教育を支援。

(5) 夏休み期間中における、教職員向け講座

※平成29年度より実施開始

- ①学習内容：博物館ボランティアによる教職員向け学習会
  - ②実施：年1回（本館にて）
  - ③対象：沖縄県内小・中・特支学校教職員
- ※詳細下記3参照。

実践としては、(1)(5)に関しては平成29年度より実施開始。他協力校に関しては、平成30年度より開始。

3 夏休み期間中における、教職員向け講座について

本館教育普及事業においては、平成22年度より小学3・4年生向け学習プログラム「民具体験学習」受入を行い、現在も博物館ボランティア員による民具の着衣体験や展示室解説などが行われている。受入数も23年度の44校をピークに毎年30校前後の受入を行っているが、県内の周知も広まる中、学習プログラムへの申し込みが殺到し、ボランティアによる受入にも飽和状態が見られ、来館サービス充実についての課題が見られる状況であった。

また、教職員の方々からも自分たちで博物館資料を活用しての授業実践の要望に高まりが見られるよ

うになった。

そこで、既に作成・製本が完成していた展示資料解説マニュアルを活用して、博物館常設展示室における展示資料、民具体験学習における授業の指導作成・進行についての指導、ボランティアによる体験学習進行の解説等を行い、教職員の授業における活用を支援する講座取り組みを夏休み期間設定し行った。

- (1) 期日 平成29年8月2日（水）

- (2) 場所 沖縄県立博物館・美術館 博物館講座室・実習室（参加20名）

- (3) 対象 県内小学校教諭・教職者

【講座の様子：展示解説】



図6-①  
ボランティアによる、展示室の解説ガイド。古民家の台所周辺の道具について。

図6-②  
ボランティアによる、展示室の解説ガイド。多くの質問が寄せられた。



図6-③  
ボランティアによる、展示室の解説ガイド。総合展示部門の解説を行った。

## 【講座の様子：民具体験学習】

図7-①  
民具体験学習の  
様子。  
民具の扱いから  
素材についてま  
で、あらゆる解  
説をボランティア  
より学習し  
た。



図7-②  
民具体験学習・  
担ぎ棒  
担いでの水くみ  
体験の様子。

図7-③  
民具体験学習・  
着衣体験の様子



図7-④  
洗濯の道具につ  
いての解説中

取り組みの結果、当館施設（実習室借用）を申請して、ボランティアの支援に依らない学校職員による民具体験実施が行われるようになった。（平成29年度は6校実施）

課題としては今回の取り組みは小学校の教職員参加を中心とした講座内容であり、様々な校種に対応した内容ではなかった。次年度においては他校種の教職員対象の講座についても実施を検討していきたいと考える。

## 4 教育普及事業における、他館の事例調査について

当館における教育普及事業推進のためには、国内における他館の事例等の調査を行う必要があると考え、国内博物館等の教育普及先進館の事例等の調査を行い、併せて本館における来館時の学習プログラム、および教育普及事業の更なる充実を図ることを趣旨として、平成29年11月に関西地方（兵庫・大阪・京都・奈良・滋賀）の視察を行った。

また、平成30年1月に関東地方（東京）の視察を行うった。

### （1）関西地方視察

#### 【11月19日 兵庫：アートビレッジセンター】

兵庫県における視察については、神戸アートビレッジセンターにて執り行われた、「ミュージアムキッズパーティー」へのイベント参加を通して、他館教育普及担当との交流を図った。

このイベントは過去の震災被災地の子どもたちに、全国から参加する各館が教育普及資料を展示し、アウトリーチを行うものであり、当館は平成28年度より計3回目の参加となる。

会場においては、来場者が約計1,000人余りを数え、盛況の様子であった。本館からは「三線」「琉球玉手箱（自然史編）」に関する資料による体験活動を提供することができた。

来場者からは、三線に興味をもって触れる親子連れが多く訪れ、資料の説明に熱心に聞き入っていた。また、沖縄の楽譜「工工四」をもとに、三線を楽しみながら奏でている様子が見られた。

かがえた。来場者からは、伝統芸能への興味・関心を持って体験に望んでいた。

図8-①  
三線のレクチャー  
の様子。  
簡単に弾ける楽  
譜を工夫した。





図8-②  
沖縄の自然史に関する資料を提供

参加の結果、「三線」に関する楽譜作成に特に興味を持って下さる館が多く、他館活用の様々な弦楽器（体験キット）の演奏に応用できる可能性があると考えられ、今後も他館と連携して情報提供を行っていくこととなった。

【11月20日 大阪：国立民族学博物館】

国立民族学博物館では、准教授の広瀬浩二郎氏への面談を主な目的として来館した。氏については、ご自身が視覚障害者であり、「ユニバーサルミュージアム構想」として、障害を持つ方々に対して、博物館資料の活用・学習プログラムの構築について尽力されている方である。今回の訪問では、視覚障害者向けの学習プログラム（ワークショップ）について紹介頂いた。



図9-①②

資料に手で触れて、何であるか考えさせるワークショップ健常者向けには、袋を用いて中身が解らないようにして触覚のみで考えさせる工夫を行っている



図10  
中国の玩具  
既存にある道具なども活用し、「触覚」に刺激を与える体験キットへの考えが印象的であった

訪問の結果、当館における身体障害者向けの学習プログラムへの応用はもちろん未就学児や小学校低

学年への活用など、特に「触覚」に訴える資料活用の手法に、学校現場にて活用する際のヒントがあると感じた。今後も氏とは情報を共有していきながら研究を進めて行ければと考えた。

【11月21日 京都：京都国立博物館】

京都国立博物館（京博）では、教育普及担当学芸員水谷氏に面会のお時間を頂き、主に学生ボランティア養成及び学校連携によるプログラム実践について情報を提供頂いた。

京博では、大学生ボランティアを年1回募り、訓練期間を設けて、小学校での出前授業を行っており、教材は国宝となっている「風神・雷神図」のレプリカを用いての解説形式の授業である。1人につき月に3回の訓練を常時行い、授業に臨んでいるとのことであった。

図11  
ボランティアの活動の様子。ハンズオンキットを用い、来館者に解りやすく展示資料を解説していた。



図12  
教育普及担当学芸員の水谷氏と。学校への学習プログラムと学生ボランティアの活用について、貴重な意見を頂いた。

当館においても、学生がボランティアを行えるような環境作り及び養成プログラムの構築の必要があると考え、現在「学校連携モデル研究事業」にて、夏休み期間中における中学生のボランティア受入を調整しており、京博の実践は大いに刺激になった。

【11月22日 奈良：奈良県立万葉文化館】

奈良県立万葉文化館（ぶんかかん）において、企画課職員及び学芸員井上氏に面会のお時間を頂き、主に学校連携によるプログラム実践及び館内催事の取り組みについて情報を提供頂いた。



図13  
奈良県立万葉文化館。  
奈良県明日香村において、主に万葉集に係る調査・研究を行っている。

ぶんかかんにおいては、学校団体が利用するのは殆どが県外の学校であり、なかなか県内の学校団体利用が伸びないのが課題であると伺った。そのため夏休み期間中においては学芸員による学習講座など、子ども向けの催事を多く開催し、来館者増にむけて取り組みを行っているとの事であった。

また、ボランティア養成・活動においては、解説員の養成ではなく、来館者に寄り添って共に考えるガイドを目指しているなど、館の考えなども参考になった。

また身近にある、様々な素材を利用して楽器を作るなどの学習プログラムを展開しており、当館における学習プログラムへの参考と充実に、大いに参考となった。



図14  
古代の衣装。  
ハンズオンキットとして、着衣体験を行うことができ、古代の衣装文化について触れる事ができる。

図15  
水道管パイプを使った尺八。  
当館における琉球楽器の笛作りへの応用などが期待できる。



た。

学校連携プログラムについては、琵琶湖を取り巻く自然や民俗資料について取り扱っている館として、学校団体受入に関しては、小学校・中学校・高等学校各校種において学習プログラムが用意されており、年間300回近くの利用があるとのことであった。その内容も本館同様民具体験から自然史、歴史について、教科書の内容を主体としたプログラムであり、主に教職者の職員が担当として活動している状況であった。

また、琵琶湖博物館では教育普及担当を、

①企画担当

主に館内催事等を中心に企画・運営

②地域連携担当

地域のサークル活動等、生涯学習振興についての運営・調整

③学校連携担当

学校の授業等における取り組み

の3つの役割分担の下運営されており、教育普及においては指定管理者の役割とは分離して行われているのが印象的であった。

ハンズオンキットに関しては、12月よりリニューアルのための工事が予定されており、来年新規でオープンとの予定であった。琵琶湖博物館のハンズオンに対する考えとしては、来館者が展示物にリンクされた資料について触れることで常設展示への興味・関心を促していくという点において、本館と同様であると感じた。



図16-①②

琵琶湖にて得られる貝や植物を利用してのグッズ製作のワークショップを通して、琵琶湖の生態系について学ぶプログラムが行われている。

【11月23日 滋賀：滋賀県立琵琶湖博物館】

滋賀県立琵琶湖博物館においては、教育普及（学校連携担当）職員及びハンズオン担当者に面会のお時間を頂き、主に学校連携によるプログラム実践及びハンズオンキットの活用について情報を提供頂いた。



図17  
琵琶湖博物館は、古代象の研究も行っている。休日ということもあり、多くの親子連れが来館していた。

図18  
琵琶湖博物館のハンズオンキット体験室「ディスカバリールーム」室内の様子。



図19  
ハンズオンキットの一つ。交流員とコミュニケーションを取ることを主眼として、学習プログラムが行われていた。

図20  
ディスカバリールームには、古民家の室内が展示されており、当時の生活の様子が学べるようになっている。



## (2) 関東（東京）視察

### 【1月24日 東京国立博物館】

東京国立博物館 藤田千織氏とお時間を頂き、主に館内における学校団体対応の学習プログラムについて情報提供を頂いた。

藤田氏がお話頂いた事で印象的であった事柄は、親子で参加できる来館者の学習プログラムの構築であった。学校対応や年齢層によるプログラムの構築も大切であるが、子供からその親まで学びとなるプログラムを構築することにより、将来的にその子供たちが館に足を運ぶようになるよう、鑑賞と学びを総合的に連鎖させた取り組みにより、結果的に来館者の増加を長期的スパンで構築することの大切さを

訴えておられていたことである。

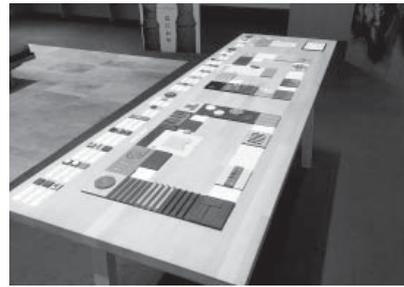


図21  
展示室の表示板。展示室で扱っている素材がはめ込まれており、目の見えない方や幼児でも理解しやすい。

またこの日は急遽当初1月25日に来館予定であったが、先方のご都合により、この日に日本民藝館古屋真弓氏と面談。館内における学校団体対応による学習プログラムについて情報提供を頂いた。民芸館では鑑賞する来館者の感受性を大切にしており、解説やガイドも最小限にしているとのこと。本館の美術工芸部門展示における、学校団体対応についても、重要な示唆を与えてくれるものであった。

### 【1月24日（水）】

国立科学博物館 岩崎誠司氏・小林由佳氏にお時間を頂き、学校の授業に則した学習プログラムについて情報提供を頂いた。

また、館内ボランティアによるワゴン解説の様子を拝見させて頂いた。当館における、総合展示室解説、ジブンボックスに相通じるところがあり、解説も5分以内と短く、内容も専門的ながら子供にもわかりやすいものであった。

図22  
子供用体験室。広い空間で、遊びながら展示資料について理解を深めることができる。



## 5 平成30年度からの事業設計について

### (1) 学校連携協力校との関わりについて

平成30年度からの協力校との関わりについては、(2 連携推進校の募集・選定についての取組)に記したとおり、2018年1月現在調整中の学校も含め、以下の4校、取り組み事業1つを展開していく考えである。調整中の学校において(平

成30年1月現在)は、今後更に調整を推進していきたい。

また、協力校以外にも、出前授業等の要望があれば、学芸員との調整の上対応していきたい。離島における移動展(平成29年度北大東島・平成30年度伊平屋島)においても、各校と調整の上学習プログラム実践を推進していきたい。

(2) 海外における、教育普及事業調査について

海外における教育普及事業調査については、平成30年度は台湾訪問を企画し、台湾各館における教育普及事業の情報収集及び学習プログラムの資料収集を行う。

趣旨・目的については、以下のとおりである。

① 本事業における趣旨

7) 今後の当館教育普及事業(学校連携事業)の展開として、本県の児童生徒に国際理解を視野に入れた、博物館資料を活用しての学習プログラムの充実・改善を図る。

4) 歴史的・文化的にも近代において本国・本県と関わりの深い台湾において国際理解教育等も含め、博物館施設および教育施設における学校連携についての取組を調査し、当館教育普及事業への応用・充実・改善を図る。

② 調査の目的

7) 美術工芸・歴史・民俗・自然史等、様々な分野の博物館施設を調査することにより、収蔵資料を利用した学習について、当館の学習プログラムへの応用・充実・改善を図る。

4) 博物館施設及び教育機関におけるアウトリーチ等実践事例に関する調査を行い、当館における学校連携学習プログラムの応用・充実・改善を図る。

③ 調査内容(予定)

【故宮博物院(台北市)】

教育普及担当への教育普及事業ヒアリング及び学校連携学習プログラムの事例等取材  
.....美術工芸博物館

【順益台湾原住民博物館(台北市)】

教育普及担当への教育普及事業ヒアリング及び学校連携学習プログラムの事例等取材  
.....民俗博物館

【国立台湾師範大学(台北市)】

博物館施設利用に係る学習プログラム事例等取材及び連携校取材.....教育大学

【国立自然科学博物館(台中市)】

教育普及担当への教育普及事業ヒアリング及び学校連携学習プログラムの事例等取材  
.....自然史博物館

【國立臺灣歷史博物館(台南市)】

教育普及担当への教育普及事業ヒアリング及び学校連携学習プログラムの事例等取材  
.....歴史博物館

下記の各館のご協力に感謝申し上げます。

(順不同)

国立民族学博物館	京都国立博物館
奈良県立万葉文化館	滋賀県立琵琶湖博物館
東京国立博物館	日本民藝館
国立科学博物館	